



「春望」を通して見た杜詩五律の対句についての考察

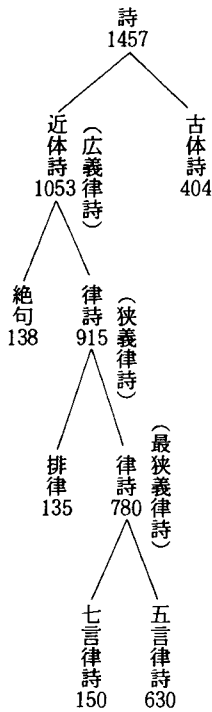
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加龍, 秀明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007846

「春望」を通して見た杜詩五律の対句についての考察

加 龍 秀 明

(一)

初唐の律詩（広義の意味での律詩で五言詩が多く見られる）は、その形式・内容においていまだ完全とはいえず、南北朝の駢儷文の流れを汲んで、外面的・言語的裝飾による美辞麗句が多い。時の移り変わりと共にそのサロンの風潮は、漸次姿を潜め個性に満ちた詩へと変化していく。盛唐に入ると、王維は、それまでの自然美の包括的・抽象的賛歌から、その個性美をデリケートな感覚で表現し、更に同時代の詩人たちは、人間生活により強い関心を示すようになる。対象が自然であれ人事であれ、その生命力の逞しさを情熱的に奔放に歌ったのが李白であり、その誠実さ故に国家を憂え、社会の矛盾に浮沈する自己の姿を嘆き訴えたのが杜甫であった。この盛唐の詩人（今日、安祿山の乱を境に盛唐・中唐の区切りとする説が有力で、その意味では中唐の詩人と呼ぶべきか）杜甫の出現は、まさしく近体詩（広義の律詩）の確立を意味することとなる。今ここに律詩の完成者杜甫の、最も人口に膾炙する「春望」を例示し、その各聯（対句に重点を置く）の解説を通して杜詩五律の全般に渡って、対句の特色の考察を試みたい。今少しく言葉を加えると、「讀杜心解」（清・浦起龍）によれば、杜甫の詩数一四五七首の約六割強が近体詩で、その内訳は次の通りである。（次の数字は首数を示す）



右の如く、五律（八句）の全体に占める比率が極めて大きく、杜甫が最も重点を

置いていたと思われる故に五律に視点を合わせた。又「文心雕龍」（梁・劉勰）の麗辭に「……故梁朝湘東王詩評云、作詩不對、本是呪文、不名爲詩。」とまであるように、当時詩人が律詩の生命たる対句に心を用いたかを思い、その修辭面に限って、「春望」を借りてその特色を具体的に述べる次第である。

(二)

春 望

國破山河在
城春草木深
感時花濺淚
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

國破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花も涙を濺ぎ
別れを恨んでは鳥も心を驚かす
烽火三月に連らなり
家書万金に抵る
白頭搔けば更に短かく
渾て簪に勝えざらんと欲す

（○平声・仄声・◎脚韻）

この詩は、至徳二年春三月、杜甫四十六才、安祿山の乱にて賊軍の手に捕虜として長安にあった時の作である。律詩の条件として、韻律上まず脚韻であるが、偶数句末に深・心・金・簪と「廣韻」下平声二十一侵により押韻し、押韻せぬ奇数句は全て仄字にて終る。平仄関係（二四不同・反法・粘法・孤平・下三平などの関係）もよく、加えて第二聯（領聯）・第三聯（頸聯）は対句表現となり、△この詩では第一聯（首聯）も対句△完璧な五言律詩と言い得る。

ところで、今日何故これ程までにこの「春望」の詩が人口に膾炙しているのか。それには当然それなりの意味が存在する。その表現の内に潜む意味内容が普遍的な人生の悲哀を語り、人々に感動を誘発せしめる。これは詩として当然のことであるが、それに加えて、その意味するところを広く一般に容易に理解させ得る外面的用語上の問題が潜んでいることも見逃してはならない。一体、杜甫の五律の中でこの詩「春望」は、彼の五律の詩の一般的傾向と同じとは認め難いところがある。そこには理解し難い語句が全く見当らず、文字通りに解釈し得る平易さがある。案外、人口膾炙の一因が内容と相俟ってこのようなところに存在するのではないかとも思われる。

さて、杜甫五律の難解表現ということに触れたが、彼の五律中の難解用語としての一つに、人名・地名を含む典故の使用がしばしば見られる。これは当然対句表現の中にも数多く見受けられる。

登兗州城樓

東郡趨庭日	東郡庭に趨するの日
南樓縱目初	南樓目を縦まにす初め
浮雲連海岱	浮雲は海岱に連なり
平野入青徐	平野は青徐に入る
孤嶂秦碑在	孤嶂には秦碑在り
荒城魯殿余	荒城には魯殿余る
從來多古意	從來古意多し
臨眺獨躊躇	臨眺して独り躊躇す

右の詩の第一聯「東郡趨庭日、南樓縱目初」の対句については、「論語」の季氏篇に見える典故「……、鯉趨而過庭、……」の知識なくして理解し難く、第二聯の「海岱」（東方の海と泰山）・「青徐」（青州と徐州）の地名の対語も「尚書」の禹貢篇「海・岱惟青州、……」、「海・岱及淮惟徐州、……」に基づく表現である。又、第三聯の「秦碑」・「魯殿」の地名を含む対語も歴史の知識を必要とする。このように典故を踏まえた対語表現の多用が杜詩五律の対句に見られる。ここにその例を少しく挙げておこう。

竟無宣室召
徒有茂陵求

（過故斛斯校書莊二首の二）

「宣室召」は漢の賈誼の故事、「茂陵求」は漢の司馬相如の故事

日有習池醉
愁來梁父吟

（初冬）

「習池醉」は晉の山簡の故事、「梁父吟」は諸葛亮の愛吟詩

又、典故は別としても対句中に人名・地名の対語を使用する場合が多い。

清新庾開府
俊逸鮑參軍

（春日憶李白）

雲薄翠微寺
天清皇子陂

（重過何氏五首の二）

岷嶺南蠻北
徐關東海西

（送舍弟穎赴齊州三首の一）

照秦通警急
過隴自艱難

（夕峰）

巴蜀來多病
荆蠻去幾年

巴蜀に來つて多病なり
荆蠻に去るは幾年ぞ

(一室)

特に地名の対語を含む対句の多用は杜詩五律の特色と見てよく、五律六三〇首中その数一〇〇余首を数える。ところで何故かかる語句を好んで使用したのか。次に一例を挙げて考えてみよう。

愁思胡笳夕 愁思胡笳の夕
淒涼漢苑春 淒涼たり漢苑の春

(自京竄至鳳翔喜達行在所三首の二)

この詩は、賊の手中に捕われの身であった杜甫が長安から間道を通り抜け、鳳翔に至り肅宗皇帝の行在所に到達した時の喜びの作である。この一聯の対句は、長安城中に捕虜としてあった時の悲しみを述べているのであって、胡笳の音を耳にした夕は愁いに沈み、本来ならば美しくあるべき長安の宮苑の春の訪れにも、却って荒廃の景を目前にして寂しく思ったが(第二聯に続く)と言うのであろう。前句の「胡笳夕」と後句の「漢苑春」が対比される。夜耳にする「胡笳」は、当時において人々に愁いを誘うのが当然の現象であるとの認識があり、「胡」一字でも遠く離れた北方の異国として荒涼たる景が心をよぎる思いを表現し、古人もしばしば詩に詠ずる常套手段である。すなわち一般的で、観念的な愁いが「胡」という文字から意識される。ところで「漢苑」の「漢」は、当時唐の代名詞として多く使用されている。漢は永遠の大帝國であったとの意味から自分の生きる時代唐の表現を憚って漢と置き換える。いわば親しい響けを持つ語である。これは白居易の長恨歌に「漢皇重色思傾國」とあるのと同じ発想でもある。従って「漢苑春」とは、本来的に完璧なるべき漢苑すなわち唐の長安の宮廷に春が訪ずれるにもかかわらず、荒廃した景を眼前にして悲しみが一層強く浸み渡ると言うのである。この対比は、聴覚から視覚への変化が見られるのみならず杜詩五律対句に見られる特色すなわち緩かなるものからより急なるものへと焦点を絞る傾向を示し(この点については後述する)一般的、観念的愁いからより厳しい現実の悲哀への進行を表わしており、その落差をかかる言葉以外で簡単に表現できるものではない。そこに「胡」と「漢」の対語の意義が見られる。このように考えると、杜甫対句に使用された地名の対語は、単なる並列的な文字ではなく、五言八句の短詩の中で時間的・空間的諸事象の対比をもつ

て、表現不可能な心象を具現化するに最もふさわしい手段であると言える。言い換えるならば、言葉で表現し尽くせない雰囲気や漂わせるのに手っ取り早い手段である。これは杜甫にしてなし得る対句の特色の一つである。

さて、「春望」の詩の中に、特に対句表現に難解な人名・地名・典故は認められない。又、杜甫特有の強引な無理押しの対句表現も見当たらない。その意味で「春望」が却って人口に膾炙する一因ともなっているのは皮肉である。

(三)

國破山河在
城春草木深

右は「春望」の第一聯であるが、第一聯は例外なく題名(主題)を概略的、説明的に表現するもので、五言律詩の常套手段である。前にも少しく触れたが、この詩は第一聯から対句表現になっている。杜甫の五律にあっては第一聯の対句が実に多く、強いて言えば杜詩五律の特色の一つでもある。

今、「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」の各第一聯の対句表現を例に取ってみる。

- | | | | |
|-----|----------------|-----|------------------|
| (一) | 不識南塘路 識らず南塘の路 | (二) | 百頃風潭上 百頃風潭の上 |
| | 今知第五橋 今は知る第五橋 | | 千章夏木清 千章夏木清し |
| (四) | 旁舍連高竹 旁舍高竹に連なり | (五) | 剩水滄江破 剩水滄江破れ |
| | 疎籬帶晚花 疎籬晚花を帯ぶ | | 殘山喝石開 殘山喝石開く |
| (六) | 風磴吹陰雪 風磴陰雪を吹き | (七) | 棘樹寒雲色 棘樹寒雲の色 |
| | 雲門吼瀑泉 雲門瀑泉吼ゆ | | 茵陳春藕香 茵陳春藕香んばし |
| (九) | 床上書連屋 床上書屋に連なり | (十) | 幽意忽不愜 幽意忽ち愜わず |
| | 階前樹拂雲 階前樹雲を払う | | 歸期無奈何 歸期奈何ともする無し |

以上多少の問題を含むが、十首中八首が第一聯の対句表現と見て差支えなからう。杜甫の場合、五律において、第一聯が対句表現であるもの約三〇首を数え、五律全首数の半数に近い。このように五律第一聯に對句が多用されている例は他の詩人には見られない特色である。このことは、五律における杜甫の對句に対する関心がいかに強いかを傍証するものである。

さて、「春望」の第一聯前句の「國破」の上二字は、安祿山の戦乱で国家の安寧が損われたことを意味し、「山河在」の下三字は、雄大な自然のいまだ存在することを述べる。五言一句の中ですでに對偶思考が働き、人事のはかなさと自然の永遠性の対比を示している。後句も同様「城春」・「草木深」が二分され、町に楽しきはずの春の訪れがあるも人々は戦いの故に離散して人影も見当らない。が、しかし自然の草木のみは繁茂していると言う。これも對偶思考が働き、人事と自然の対比を前句、後句重ねて表現する。第一聯では、人事と自然の対比が對句表現により強く打ち出されているが、しかし彼は人生を否定している訳ではない。自然との対比の中によりよき人生を求め、自己の不遇を嘆きながらも何かを求めてやまない。

「春望」の「望」の字は、説文解字によると「出亡、在外望其還也」とある。「春望」とは、春の景をただ単に對象的に眺めるのではなく、戦乱により失われた情景を目にして再び春の喜びを求め望むことであって、第一聯の意味に合致する。

ところで、杜詩五律の對句の一般的なあり方からみて、五言一句の中で上二字と下三字が對偶關係を示したり、因果關係を持つ詩は見当らない。又、それまでの詩人たちにもあり得ない表現であって、非常に強い印象を与える特異な表現である。さて、前句と後句の對語の關係は次の通りである。

國 破 山河 在
← ← ←
城 春 草木 深

前句の「國」・「山河」という漠然とした広がりを持つ大きな空間から、後句では「城」・「草木」という一層具象化された身近な自然へと視点をより絞って對句を構成する。これは杜詩五律對句の最も顕著な特色であって、前句と後句とは入れ替えのきかぬ存在である。この点については、第二聯・第三聯の項で詳細に述べる。次に「破」と「春」の對語に関しては、清水茂氏の「中國詩文論叢」の中に詳しい

が、修辭上でかなり強引な對語使用をすることがある。これが却って過去に見られぬ新鮮さとなって映る。丁度俳人芭蕉の表現上の文法無視と言われる立場に似ている。又、「破」と「春」との對語も、いとわしい戦乱から最も待ち望まれる平和な春へと、言い換えれば失意から期待への変化とみられ「春望」の題意がそこにも感得される。

ここで音声の問題に少しく触れておくならば、「城春」は、chéng-chūnの発声で双声語である。又、第四聯の「勝簪」も双声語である。杜詩五律には、双声語・疊韻語・重字がそれぞれ個々に使用される場合は極めて多いが、對句表現の對語としてはさして多く見当らない。

(双声對)

所向無空闊 向かう所空闊無く
眞堪託死生 眞に死生を託すに堪えたり

(房兵曹胡馬詩)

(疊韻對)

蹉跎暮容色 蹉跎たる暮容色
悵望好林泉 悵望す好林泉

(重過何氏五首の五)

(双声疊韻對)

攔身思狡兔 身を攔やかして狡兔を思う
側目似愁胡 目を側めて愁胡に似たり

(畫鷹)

(重字双)

蕭蕭古塞冷 蕭々として古塞冷かに
漠漠秋雲低 漠々として秋雲低る

(蕭蕭古塞冷)

右の例の如く、双声・疊韻が各聯の中で對偶的に用いられる場合は極めて少く、重字の如きは、四十八首の對句に使用されているに過ぎない。このことから杜詩五律の對句では、音声の単なる繰り返しを嫌う姿勢が見られる。對句を型にはめた安易な繰り返しに終らせないで、微妙な変化を求めるのは修辭上のみならず、音声上においても顕著に表れるのである。

感時花瀝淚
恨別鳥驚心

(四)

第二聯は、完全な対句で表現され、第一聯を受けて前者の情景を更に細かく具体的に描写するのが一般的である。第一聯の「國破」（戦いによる国家の乱れ）を第二聯の「感時」（戦乱の時勢を自己の心の中に悲しく受け止める）で受け、「城春」（町に春が訪れても人々は離散）を「恨別」（戦火によって自分の妻子との別れを心底より悲しむ）で受ける。第一聯の漠然たる状況描写から第二聯では、より身近な情況表現に移る。前句の「花瀝淚」、後句の「鳥驚心」も、第一聯の内容に比べてより具体的に身近な自然描写である。

ここで重視すべきは、第二聯が第一聯の自然の単なる細述にのみ終らず、必ず自己の心情が色濃くにじみ出てくることである。すなわち心象表現となっている点である。これは杜詩五律第二聯の共通した表現特色と見てよい。このように見てくると、以前より行われている「花」・「鳥」を対象と見るのか、擬人化として捉えるかの問題についても、吉川幸次郎氏の力説される通り擬人化されていると見るべきであろう。ただし、杜甫自身は強いて技巧に注力した訳ではないと思うが、文法的に見ても、第一聯からくる自然と人事の対比という流れからしても、花さえも涙を流し、鳥さえも悲しみに心をうたれて鳴くと見るのが自然である。これに似た対句表現は、五律には見当たらないが、杜甫の「絶句二首」の(二)に「江碧鳥逾白、山青花欲燃」とある。この場合前句、後句とも上二字と下三字を区分しているように「感時花瀝淚、恨別鳥驚心」も前後句とも上二字と下三字で区分して、上字は杜甫（人間）が主体で、時勢を愁い、妻子との別れを悲しんでいる状況を、そして下三字は、その心でもって見た自然、すなわち花や鳥（自然）さえも悲しみに涙し、声を発すると見た方が第一聯を受けるのに適している。そこには、人間の心情を通して見た自然、より人間的、より人間生活に密着した自然、その自然を杜甫は主体的に自己の感情を通して見るのである。そこには生きた自然、鼓動している自然が描かれる場合が多い。王維が人間も自然の一点景として描く客観的自然とは異なり、むしろ杜甫のそれは、人間の心情によって把握される主観的自然、更に人間に同化して描かれた自然であると言える。

さて、第二聯の対句は、第三聯の対句にも言い得ることであるが、これまでの詩人の対句と異り、美辞麗句の対比でもなければ平板な対語の羅列でもない。前句と後句の間には、必ず主題に向ってある感情を高める流れ、または変化がある。これこそ杜詩対句の妙味である。

そこで杜甫以前の詩人の五律第二聯の対句を挙げて杜甫のそれと比較してみよう。

風聲一何盛 風声一に何ぞ盛んなる
松枝一何勁 松枝一に何ぞ勁き

（贈從第三首の二——劉公幹）

零雨潤墳澤 零雨は墳沢を潤し
落雪灑林丘 落雪は林丘に灑ぐ

（西陵過風獻康樂——謝惠連）

山桃發紅萼 山桃は紅萼を發き
野蕨漸紫苞 野蕨は紫苞を漸む

（酬從弟惠連五首の五——謝靈運）

黃鸝隱花飛 黃鸝は花に隠れて飛び
蛺蝶空空戲 蛺蝶は空に空々々々戯れる

（石頭答庾郎丹——何遜）

樹樹皆秋色 樹樹皆く秋色あり
山山唯落暉 山々唯落暉あり

（野望——王績）

郭門臨渡頭 郭門渡頭に臨み
村樹連溪口 村樹溪口に連なる

（新晴晚望——王維）

以上のように杜甫以前の五律第二聯に見える対句は、おおむね同範疇に視点を置

いた、いわば言葉の並列的羅列に過ぎない。これに対して杜詩五律の第二聯対句はどうか。

出門流水住 門を出づれば流水住まり

回首白雲多 首を回らせば白雲多し

(陪鄭廣文遊何將軍山林十首の十)

「流水住」から「白雲多」へ、すなわち視点が下方の景から上方の景へ、近景から遠景へと移り、足下を見ると水は流れを止め、振り向くと白雲は山のかなたから湧き出るように私の帰路をたざしている。静と動との対比でもある。

生還今日事 生還今日の事

問道暫時人 問道暫時の人

(自京竄至鳳翔喜達行在所三首の二)

前句は、生きて帰った今日の喜びで、後句は、問道を逃げ回った過去のいまわしい思い出である。すなわち時間的に現在と過去との対比を示している。

亂雲低薄暮 乱雲薄暮に低れ
急雪舞廻風 急雪廻風に舞う

(對雪)

前句は、幾重にも垂れこめた暗雲の夕、後句は、身近に白き風雪の舞う景を述べている。すなわち暗と明、静と動、遠景と近景との対比を見ることが出来る。

星垂平野闊 星垂れて平野闊く
月湧大江流 月湧いて大江流る

(旅夜書懷)

「星垂」は大空一面に広がる星に対して上方から下方への、そして「月湧」は一点に絞られた視点が下方から上方へ向っていく。「平野闊」と「大江流」は、平面と線、静と動との対比として表現されている。

山虛風落石 山は虚しくして風は石を落し
樓靜月侵門 樓は静かにして月は門を侵す

(西閣樓)

これは遠景と近景、聴覚と視覚、暗と明の対比を表現の内に潜めている。以上のように杜詩五律の対句は、第二聯のみならず、すべての聯において変化に富み退屈でない。このことは自然を漠然と眺めるのではなく常に五官を働かせ、より緊張した感情を導き出そうとする。

「春望」の第二聯「感時花灑淚、恨別鳥驚心」においても、視覚と聴覚の対比を通して視点が下方から上方の一点に焦点が絞られ、静的な景色から動的な空間に走り、「感時」(戦乱の時勢を思う心)から「恨別」(家族との別れを悲しむ心)へ、すなわち緩慢な感情がより具体的で身近な事象に集中されて緊張感を与えるのである。杜詩五律の第二聯の対句は、人間生活に密着した主体が自然を借りて、より身近に自己の感情を具現化して一層の緊張感を醸し出すところに他の詩人と異なる特色を持つ。

(五)

烽火連三月

家書抵萬金

第三聯も対句表現であり、第二聯の自然描写ないしは心象風景を更に深め、自己中心の心情を吐露するものであり、自然的なものからより人間的なもの、より身近い具象表現へと転換していく。この聯の言うところは、春三か月間の長きに渡り戦火にさらされ、今賊中にあるが故に妻子からの手紙は何物にも代え難い値打ちを持つ。つまり、妻子の安否に心している訳である。

さて、第三聯の対句も第二聯で述べたように平板的な羅列でなく屈曲していて心情を一点に凝集しようとする作用がある。「烽火」・「三月」の前句から後句の「家書」・「萬金」と漠然たる事件からより身近な具象化された対語へと焦点を絞る。すなわち時勢の流れから妻子に対する思慕の情へと変化する。この場合、「連三月」は陰曆三月の時点として言い切るより、春三か月間続くと解釈する方がより漠然とした広がりから「抵萬金」という具体的でより身近なものへの感情凝集に役立ち、前句、後句の杜甫の対句の流れからも自然であると思われる。

ところで、第三聯では前句と後句が因果関係にあることに気付く。烽火が三か月

間も続く故に家書が万金に当たる訳であって、前句と後句の入れ替えは全くきかない。一般に杜詩五律の対句は、勿論音声面の制約もあるが、意味内容の流れの面において入れ替えのきかぬところに意味がある。

霧樹行相引 霧樹行くゆく相い引き

連山望忽開 連山望みは忽ち開く

(自京竄至鳳翔喜逢行在所三首の一の第三聯)

霧がかつた道の並木に導かれて進んで行くうちに、たちまち連山の眺望が目の前に開かれることを述べ、時間的流れに沿った表現で前句と後句の入れ替えは不可能である。

親朋無一字 親朋一字無く

老病有孤舟 老病孤舟有り

(登岳陽樓の第三聯)

これも親族、朋友からの便りのない故、ただ一人一艘の小舟に身を託す孤独な杜甫の姿が結論できるのであり、入れ替えてはならない。入れ替えがきかぬと言え、この第三聯に流水対が多く見出される。流水対とは、前句と後句の二句をもって初めて一つの意味を持つ対句であって、当然その入れ替えは不可能である。二句をもって一つの意味を持たせる表現は、一般には対句を必要としない第四聯に使用される場合が普通で、「春望」の第四聯「白頭搔更短、渾欲不勝簪」がそれである。杜詩五律にあっては、第二聯に「遙憐小兒女、未解憶長安」(月夜の第二聯)の如く流水対が見受けられる場合もあるし、第三聯にもかなり多くの流水対の使用が認められる。次にその例を挙げてみよう。

野老來看客 野老来て客を見

河魚不取錢 河魚錢を取らず

(陪鄭廣文遊何將軍山林十首の六)

何日霑微祿 何の日か微祿に霑い

歸山買薄田 山に帰りて薄田を買わん

(重過何氏五首の五)

自失論文友 文を論ずる友を失いて自り
空知賣酒壚 空しく知る売酒の壚

(贈高式顔)

側想美人意 側に想う美人の意

應悲寒螿沈 應に寒螿の沈めるを悲しむなるべし

(銅瓶)

聞說真龍種 聞くならく真の龍種

仍殘老驄驪 仍ち老いたる驄驪に残す

(秦州雜詩二十首の五)

流水対については、杜甫は第二聯、第三聯において割合自由に使用しているが、彼以前においては対句を必要条件とする第二、第三聯における使用がほとんど見られない。ここでも杜詩五律の対句のあり方が、単なる言葉の並列的あやに終っていないことが感得される。

さて、杜詩五律の第二聯が大方外的自然の描写とすれば、第三聯の対句は、内的心情の表白であり、その前句と後句との結び付きが特に密接で、前句から後句へと向って核心に迫って焦点を絞り、自己中心の感情に緊張感を与える存在である。

(六)

白頭搔更短

渾欲不勝簪

彼四十六才、やっと役人になった自分は賊中に捕われの身、心労により年老いて感じる悲しさを歌っている。後句の「不勝簪」とは、白髪が抜け落ち役人の冠を留める簪が使用できぬを言い、再び役人となって生活の糧を得ることも不可能であり、国家に忠誠を尽し得ない自己を嘆くのである。しかしその本意は嘆きのみにあるのではなく、再び役人として名を成したいという願望が秘められている。この願望こそ「春望」と題せられるものであり「春望」の結論である。

さて、杜詩五律は第一聯から第四聯まで各聯が系統的に結ばれ、外的なものから

内的なものへと収束されていく。その流れの中で対句の働きは大きく、感情の求心的作用を果たし、大いに全体の流れに効果を与える。又、形式上第一聯も対句表現を使用する場合が極めて多く、その上地名・人名の対語が対句に多用されるという特色もあるが、特に第二聯と第三聯の対句関係は、広がりを持った自然の情景からより緊張した自己の心情表現に流れ、しかも各聯の対句には、前句と後句の間に空間的・時間的または外的（自然）・内的（人間感情）諸事象に関する展開が見られる。それは単なる美辞麗句の羅列の如き冗長に陥らず、抵抗を感じない程に微妙な変化があり、常に漠然たるものからより身近なものへと視点を移し焦点を絞って、切迫した感情を表す。しかもその根底には、常に自然（永遠性）対人事（はかなさ）、あるべき姿（理想）対否定されるべき時勢（現実）等の普遍的对偶観念が潜んでいるのも特筆するべきである。かかる対偶観念からくる喜怒哀楽の感情は、特に東洋人にとっていつの時代にも提起される、言わば普遍的・永遠的関心事であり、それがいかに詩にて表現するかは詩人の力量である。杜甫は、対句表現においてその妙を巧みに表し得た唯一の詩人と言えよう。

以上「春望」を借りて、その解説と同時に杜詩五律の対句に関して修辭面に重点を置いての特色を考察した次第である。

参考文献

- 仇兆鰲「杜詩詳注」 大文堂刊 清康熙三十二年
- 鈴木虎雄「杜小陵詩集」（續國譯漢文大成）四冊 國民文庫版 昭和四年二月二十日・六年十月二十日二版本
- 浦起龍「續杜心解」 靜寄東軒刊 清雍正二年
- 吉川幸次郎「杜甫詩注」五冊 筑摩書房 昭和五十二年八月三十一日・五十八年六月二十日初版本
- 吉川幸次郎「杜甫私記」第一卷 筑摩書房 昭和二十六年二月二十五日三版本
- 吉川幸次郎「杜甫ノート」 創元社 昭和二十七年十二月二十五日初版本
- 黒川洋一「杜甫の研究」 創文社 昭和五十九年十二月二十五日二版本
- 清水茂「中國詩文論叢」 創文社 昭和六十四年二月十五日初版本
- 空海「弘法大師全集」第三輯 密教文化研究所刊 昭和四十年九月一日増補三版本
- 戸田浩曉「文心雕龍」（新釈漢文大系）上 明治書院 昭和四十九年十一月二十

五月初版本

- 胡克家「孫批胡刻文選」 同文書局石印本 清光緒十四年
- 高木正一「杜詩の對句についての一考察」 中国文学報第一冊 京大中文研究室 昭和二十九年十月
- 都留春雄「王維」（中國詩人選集） 岩波書店 昭和五十二年三月十日十六版本
- 黒川洋一「杜甫」上・下（中國詩人選集） 岩波書店 昭和五十二年三月十日十六版本
- 田森翼「中國の名詩鑑賞初唐」 明治書院 昭和五十年十一月十日初版本
- 中島敏夫「中國の名詩鑑賞盛唐」 明治書院 昭和五十三年九月二十五日初版本

「要旨」

対句のあり方は二面から考えねばならない。その一は、各聯にある対句（前句と後句の関係）そのものの意味するもの、又、その一は、詩全体の流れにおける対句の働きである。今その頂点に立つと思われる「春望」を例に挙げ、杜甫の五言律詩全般と比較対照しながらその妙味を探ってみた。

一般的に杜詩五律には、必要条件とされない第一聯に對句が多く見られ、又、對句に典故、人名、地名（事実の知識なくして理解し難い）が多用される特徴もあるが、それにも増して對句それ自体に自然の永遠性と人事のはかなさ、理想と現実といった普遍的对偶観念が根底にあって、大方外面的事象の漠然たるものから内面的心情のより凝集されたものへと流動していく傾向がある。「春望」を例としても分るように、各聯の關係は、それに呼応して第一聯から第二聯への移行がより具体的で身近な自然描写へと向い、更に第三聯では第二聯より明確に核心に迫り自己の心情を強く訴えようとする。各聯の系統的な流れにふさわしい對句の案出そして對句を詩全体の流れにいかたに作用させるか。この二点の組み合わせの妙を「春望」をその代表として杜詩五律に見ることが出来る。

一九九二年四月十日受理

※（一般教養科）